Ⅲ－10　　津軽地域における急性期脳虚血再灌流療法の現状と課題

○嶋村 則人　奈良岡 征都　片山 耕輔　角田 聖英
片貝 武　藤原 望　松田 尚也　浅野 研一郎
大熊 洋揮
(弘前大学大学院医学研究科 脳神経外科学講座)

心原性脳塞栓症を代表とする急性期脳虚血に対する t-PA 静注療法が 2005 年に保険収載され、標準治療として行われている。さらに、2015 年には脳血栓回収療法の有効性について複数のエビデンスが発表され、2017 年に脳卒中診療ガイドラインではグレード A で推奨された。しかしながら、脳血栓回収療法はおろか、t-PA 静注療法も行うことができない症例が数多くみられる。

当院における急性期脳虚血再灌流療法について、現状を報告し、課題を考察する。脳血栓回収療法は 2010 年から始まり、年間 2〜3 例程度であった。2015 年から 7－19－24 件と経年的に増加した。これに伴い、治療成績は、1. 搬入から治療開始までの時間が 50 分±24sd。2. TICI 2b 以上の有効再開通が 86%。3. 発症 90 日後の m-RS 2 以下の自立生活が 57%。と良好な結果であり、経年的に改善している。しかし、最終健常から頭蓋内再灌流までの時間は平均 401 分であり、有意な短縮を得られなかった。

そこで、更なる改善のために、1. 救急救命士対象の脳卒中勉強会開催。2. 青森県急性期脳梗塞血管内治療ネットワーク設立。3. 青森県健康福祉部の協力を得て県内全病院への脳血栓回収療法の案内送付を行っている。

病院前対応、病院連携を行い、急性期脳虚血からの回復例を増やす取り組みを今後も積極的に行っていく予定である。